

大つごもり

樋口一葉

青空文庫

(上)

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆうくと吹ぬきの寒さ、お、堪えがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大臺にして叱りとばさるゝ婢女の身つらや、はじめ受宿の老嫗さまが言葉には御子様がたは男女六人、なれども常住内にお出あそばすは御總領と末お二人、少し御新造は機嫌かなれど、目色顔色呑みこんで仕舞へば大した事もなく、結句おだてに乗る質なれば、御前のお様一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は缺くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝き事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭やに成つたら私の所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を探せとならば足は惜しまじ、何れ奉公の祕傳は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つぞかし、目見えの濟みて三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさらひに午後よりとある、其支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る

曉、あたゝかき寢床の中より御新造灰吹きをたゝきて、これくと、此詞が目覺しの時計より胸にひゞきて、三言とは呼ばれもせず帯より先に襷がけの甲斐くしく、井戸端に出れば月かげ流しに残りて、肌を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど汲みて、十三は入れねば成らず、大汗に成りて運びけるうち、輪寶のすがりし曲み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆるくに成りて、指を浮かさねば他愛の無きやう成し、その下駄にて重き物を持ちたれば足もと覺束なくて流し元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべ井戸がはにて向ふ臈したゝかに打ちて、可愛や雪はづかしき膚に紫の生々しくなりぬ、手桶をも其處に投出して一つは満足成しが一つは底ぬけに成りけり、此桶の價なほどうか知らねど、身代これが爲につぶれるかの様に御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品は無代では出来ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が當るぞえと明け暮れの談義、來る人毎に告げられて若き心には恥かしく、其後は物ごとくに念を入れて、遂ひに麁想をせぬやうに成りぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常の事、三日四日に歸りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開闢以來を尋ねたらば折る指に彼の内儀さまが袖口おもはるゝ、思

へばお峰は辛棒もの、あれに酷く當たらば天罰たちどころに、此後は東京廣しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容きりや貌うが申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商賣の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど、六づかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は賣りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目當にして幾足幾町と其しらべの苦るしき、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡むだにして、お暇ともならば彌いよく々病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も氣の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此處に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一躰物せわしき中を、こと更に選えらみて綾羅きらをかざり、一昨日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中うちゅうとの觸れに成けり、此お供を嬉しがるは平常つねのこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらば夫れまでとして遊びの代りのお暇を願ひしに流石は日頃の勤めぶりもあり、一日すぎでの次の日、早く行きて早く歸れと、さりとは氣まゝの仰せに有難うぞんじます

と言ひしは覺えで、頓ては車の上に小石川はまだかまだかと鈍かしがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神は此頭に宿り給ふべき大薬罐の額ぎはびか〜として、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子大根の御用をもつとめける、薄元手を折かへすなれば、折から直の安うて嵩のある物より外は棹なき舟に乗合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物は何時も帳面につけた様など笑はるれど、愛顧は有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三之助とて八歳になるを五厘學校に通はするほどの義務もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出して荷を我が家までかつぎ入れると其まゝ、發熱につゞいて骨病みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰べへらして天秤まで賣る仕義になれば、表店の活計たちがたく、月五十錢の裏屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節が有らばとて引越しも無慘や車に乗するは病人ばかり、片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峰は車より下りて處此處と尋ぬるうち、凧紙風船などを軒につるして、子供を集めたる駄菓子やの門に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落膽して思はず往來を見れば、我が居るよりは向ひのがはを瘦ぎすの子供が薬瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く餘り瘦せたる子と

思へど、様子の似たるにつか／＼と驅け寄りて顔をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちやんで有つたか、さても好い處でと伴なはれて行くに、酒やと芋やの奥深く、溝板がた／＼と薄くらき裏に入れば、三之助は先へ驅けて、父さん、母さん、姉さんを連れて歸つたと門口より呼び立てぬ。

何お峰が來たかと安兵衛が起上れば、女房は内職の仕立物に餘念なかりし手をやめて、まあ／＼是れは珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六疊一間に一間の戸棚只一つ、箆筒長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかけも無く、今戸焼の四角なるを同じ形の箱なりに入れて、これがそも／＼此家の道具らしき物、聞けば米櫃も無きよし、さりとは悲しき成ゆき、師走の空に芝居みる人も有るをとお峰はまづ涙ぐまれて、まづ／＼風の寒きに寝てお出なされませ、と堅焼に似し薄蒲團を伯父の肩に着せて、さぞさぞ澤山んとの御苦勞なさりましたる、伯母様も何處やら痩せが見えまする、心配のあまり煩ふて下さりますな、夫でも日増しに快よい方で御座んすか、手紙で様子は聞けど見ねば氣にかゝりて、今日のお暇を待ちに待つて漸との事、何家などは何うでも宜ござります、伯父様御全快にならば表店おもてに出るも譯なき事なれば、一日も早く快く成つて下され、伯父様に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急く、車くるまや夫の足が何時より遅いやうに思はれて、御好物の飴

屋が軒も見はぐりました、此金は少々なれど私が小遣の残り、麴町の御親類よりお客の有し時、その御隠居さま寸白すぱくのお起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたらば、前垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅けれど他處よそよりのお方が鼻根になされて、伯父さま喜んで下され、勤めにくくも御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素ぢみなれば伯母さま懸けて下され、巾着は少し形なりを換へて三之助がお辨當の袋に丁度宜いやら、夫れでも學校へは行きますか、お清書が有らば姉にも見せてと夫れから夫れへ言ふ事長し。七歳のとしに父親得意場の藏普請に、足場を昇りて中ぬりの泥鍔こてを持ちながら、下なる奴に物いひつげんと振向く途端、曆に黒ぼしの佛滅とでも言ふ日で有しか、年來馴れたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模様がへの處ありて、掘りおこして積みたてたる切角に頭腦したくか打ちつけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衛が同きやうだい胞なれば此處に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重く成りて亡せられたれば、後は安兵衛夫婦を親として、十八の今日まで恩はいふに及ばず、姉さんと呼ぶるれば三之助は弟のやうに可愛く、此處へ此處へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病氣で淋しく愁らかる、お正月も直きに來れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無理をいふて困らせては成りませぬと教ゆれば、困ら

せる處か、お峰聞いて呉れ、歳は八つなれど身軀も大きし力もある、我が寐てからは稼ぎ
 人なしの費用いりめは重なる、四苦八苦見かねたやら、表の鹽物やが野郎と一處に、蜆しづみを買ひ出
 しては足の及ぶだけ擔ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さ
 まが奴の孝行を見徹してか、兎なり角なり藥代は三が働き、お峰ほめて遣つて呉れとて、
 父は蒲團をかぶりて涙に聲をしばりぬ。學校は好きにも好きにも遂ひに世話をやかしたる
 事なく、朝めし喰べると馳け出して三時の退校ひけに道草のいたづらした事なく、自慢では無
 けれど先生さまにも褒め物の子を、貧乏なればこそ蜆を擔がせて、此寒空に小さな足に草
 鞋をはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峰は三之助を抱きしめて、さても
 さても世間に無類の孝行、大がらととも八歳やつは八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草
 鞋くひは出来ぬかや、堪忍して下され、今日よりは私も家に歸りて伯父様の介抱くわし活計の助
 けもしまする、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の繩の水を愁つらがつたは勿躰ない、學校ざか
 りの年に蜆を擔がせて姉が長い着物きて居りりようか、伯父さま暇を取つて下され、私は
 最早奉公はよしまするとて取亂して泣きぬ。三之助はをとなく、ほろりほろりと涙のこ
 ぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣きぬ破れて、此肩これに擔ぐか見る
 目も愁つらし、安兵衛はお峰が暇を取らんと云ふに夫れは以ての外、志しは嬉しけれど歸り

てからが女の働はたらき、夫れのみか御主人へは給金の前借もあり、それツ、と言ふて歸られる物では無し、初奉公うひぼうこうが肝腎、辛棒がならで戻つたと思はれても成らねば、お主大事に勤めて呉れ、我が病も長くは有るまじ、少しよくば氣の張弓、引つゞいて商あひもなる道理、あゝ今半月の今歳が過れば新年はるは好き事も來たるべし、何事も辛棒く、三之助も辛棒して呉れ、お峰も辛棒して呉れとて涙を納めぬ。珍らしき客に馳走は出來ねど好物の今川焼、里芋の煮ころがしなど、澤山たべろよと言ふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦日に迫りたる家の難義、胸つに痞つかへの病は癩しかにあらねども床に就きたる時、田町の高利かしより三月しぼりとて十圓かりし、一圓五拾錢は天利とて手に入りしは八圓半、九月の末よりなれば此月は何うでも約束の期限なれど、此中にて何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して日に拾錢の稼かせぎも成らず、三之助に聞かすとも甲斐なし、お峰が主は白金しろかねの臺たい町まちに貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常じょう綺羅やうきら美々しく、我れ一度お峰への用事ありて門まで行きしが、千兩にては出來まじき土藏の普請、羨うらやましき富貴ふうきと見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、此月末に書かへを泣きつきて、をどりの一兩二分を此處に拂へば又三月の延期のべにはなる、斯いくは慾ごつに似たれど、大道餅買ふてなり三ヶ日の雜

煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二兩、言ひにくく、共この才覺たのみ度よしを言ひ出しけるに、お峰しばらく思案して、よろしう御座んす慥かに受合ひました、むづかしくはお給金の前借にしてなり願ひましよ、見る目と家内とは違ひて何處にも金錢の埒は明きにくけれど、多くでは無し夫れだけで此處の始末がつくなれば、理由を聞いて厭やは仰せらるまじ、夫れにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は歸ります、又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金を受合ける。金は何として越す、三之助を貰ひにやろかとあれば、ほんに夫れで御座んす、常日さへあるに大晦日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど、三ちやんを頼みます、晝前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峰は歸りぬ。

(下)

石之助とて山村の總領息子、母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は
 妹娘の中にとの相談、十年の昔より耳に挟みて面白からず、今の世に勘當のならぬこそを

かしけれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不了簡をはじめぬ、男振にがみありて利發らしき眼ざし、色は黒けれど好き様子ふうとて四隣あたりの娘どもが風説うはきも聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騒ぎは其座限りぎ、夜中に車を飛ばして車くるま町まちの破落戸ごがもとをたゞき起し、それ酒かへ肴と、紙入れの底をはたき無理を徹すが道樂なりけり、到底とてこれに相續は石油藏へ火を入れるやうな物、身代けふ烟りけふと成りて消え残る我等何とせん、あとの兄弟も不憫と母親、父に讒言ざんげんの絶間なく、さりとして此放蕩れ子を養子にと申受る人此世にはあるまじ、とかくは有金の何ほどを分けて、若隠居の別戸籍にと内々の相談は極まりたれど、本人うわの空に聞流して手に乗らず、分配金は一萬、隠居扶持月々おこして、遊興に關を据ゑず、父上なくなれば親代りの我れ、兄上と捧げて竈の神の松一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸の御主人に成りて、此家の爲には働かぬが勝手、それ宜しくば仰せの通りになりましよと、何うでも嫌やがらせを言ひて困らせける。去歳こぞにくらべて長屋もふゑたり、所得は倍にと世間の口より我が家の様子を知りて、をかしやをかしや、其やうに延ばして誰が物にする氣ぞ、火事は燈明皿よりも出る物ぞかし、總領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子いざらこあたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大吞

みの場處もさだめぬ。

それ兄様のお歸りと言へば、妹ども怕こはがりて腫れ物のやうに障るものなく、何事も言ふ
 なりの通るに一段と我がまゝをつのらして、炬燵に兩足、酔ぎめの水を水をと狼藉はこれ
 に止めをさしぬ、憎くしと思へど流石に義理は愁つららき物かや、母親かげの毒舌をかくして
 風引かぬやうに小抱卷何くれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり田作ごまめ、人手にかけて
 は粗末になる物と聞えよがしの經濟を枕もとに見しらせぬ。正午ひるも近づけばお峰は伯父へ
 の約束こゝろもと無く、御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに頭つむ
 りの手拭ひを丸めて、此ほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、
 今日の晝る過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合
 せ私の喜び、いついつまでも御恩に着まするとて手をすりて頼みける、最初はじめいひ出し時に
 やふやながら結局つまりは宜しと有し言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅いひては却
 りて如何と今日までも我慢しけれど、約束は今日と言ふ大晦日のひる前、忘れてか何とも
 仰せの無き心もとなさ、我れには身に迫りし大事と言ひにくきを我慢して斯くと申ける、
 御新造は驚きたるやうの惘あきれ顔して、夫れはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病
 氣、つゞいて借金の話しも聞きましたが、今が今私しの宅うちから立換へようとは言はなかつた

筈、それはお前が何ぞの間違へ、私は毛頭すこしも覚えの無き事と、これが此人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて褌つまを重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものゝ兄が見る目うるさく、早く出てゆけ疾とく去いねと思ふ思ひは口にこそ出さねもち前の疔癩いんしたに堪えがたく、智識の坊さまが目めに御覽ごらんじたらば、炎につゝまれて身は黒烟りに心は狂亂の折ふし、言ふ事もいふ事、金は敵薬ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覚えあれど何の夫れを厭ふ事かは、大方お前が聞ちがへと立きりて、烟草たばこ輪わにふき私は知らぬと濟しけり。

ゑゝ大金でもある事か、金なら二圓、しかも口づから承知して置きながら十日とたゝぬに毫まろくはなさるまじ、あれ彼の懸け硯いんの引出しにも、これは手つかずの分と一ト束、十か二十か悉みな皆みなとは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三之助に雑煮のはしも取らさるゝと言はれしを思ふにも、どうでも欲しきは彼の金ぞ、恨めしきは御新造とお峰は口惜しさに物も言はれず、常々をとなしき身は理屈りくつづめにやり込る術もなく、すゞぐゝと勝手に立てば正午の號砲ごうぱうの音たかく、かゝる折ふし殊更胸むねにひゞくものなり。

お母ははさまに直様すくさまお出下いでさるやう、今朝けさよりのお苦くるるしみに、潮時は午後、初産はつさんなれば

旦那とり止めなくお騒としよりぎなされて、お老人なき家なれば混雑お話しにならず、今が今お出でをとて、生死の分目といふ初産に、西應寺の娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬ物なり、家のうちには金もあり、放蕩のらどのが寐ては居る、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乗りけれど、かゝる時氣樂の良人が心根にくゝ、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望がはり合ひなき人をつく／＼と恨みて御新造いでられぬ。

行きちがへに三之助、此處と聞きたる白金臺町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすばらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕こは々々のぞけば、誰れぞ來しかと竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く來たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま這入つても叱かられはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお禮を申して來いと父さんが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづ／＼待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外うちとを見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子おひはこに餘念なく、小僧どのはまだお使ひより歸らず、お針は二階にてしかも聾なれば子細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の眞最中まっただなか、拜みまする神さま佛さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお當てなさら

ば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なれば、お免ゆるしなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすまして下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を、見し人なしと思へるは愚かや。

.....

その日も暮れ近く旦那つりより惠あび比須がほして歸らるれば、御新造も續いて、安産の喜びに送りの車夫ものにまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも、一人は必らず手傳はすると言ふて下され、さてさて御苦勞と蠟燭代などを遣りて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身躰を片身かりたき物、お峰小松菜はゆで、置いたか、數の子は洗つたか、大旦那はお歸りに成つたか、若旦那はと、これは小聲に、まだと聞いて額に皺を寄せぬ。

石之助其夜はおとなしく、新年はるは明日よりの三ヶ日なりとも、我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき袴づれに挨拶も面倒、意見も實は聞あきたり、親類の顔に美しくしきも無ければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、

一先お暇として何れ春永はるながに頂戴の數々は願ひまする、折からお目出度矢先、お歳暮には
 何ほど下さりますかと、朝より寢込みて父の歸りを待ちしは此金これなり、子は三界の首くび械かせ
 といへど、まこと放蕩のらを子に持つ親ばかり不幸なるは無し、切られぬ縁の血筋といへば有
 るほどの悪戯を盡して瓦解ぐわかいの曉に落こむは此淵、知らぬと言ひても世間のゆるさねば、
 家の名をしく我が顔はづかしきに惜しき倉庫くらをも開くぞかし、それを見込みて石之助、今
 宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を爲たるもあれば、花見のむしろに狂風一
 陣、破落戸ごろつき仲間に遣る物を遣らねば此納まりむづかしく、我れは詮方なけれどお名前に申
 わけなしなど、つまりは此金これの欲しと聞えぬ。母は大方かゝる事と今朝よりの懸念うた
 がひなく、幾金いくばとねだるか、ぬるき旦那どの、處置はがゆしと思へど、我れも口にては勝
 がたき石之助の辯に、お峰を泣かせし今朝とは變りて父が顔色いかにとばかり、折々見る
 や尻目おそろし、父は靜かに金庫の間へ立ちしが頓て五十圓束一つ持ち來て、これは貴様
 に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹どもが不憫、姉が良人の顔にもかゝる、此山村は代々堅
 氣一方に正直律義を眞向にして、悪い風説うはさを立てられた事も無き筈を、天魔の生れがはり
 か貴様といふ悪者わるの出來て、無き餘りの無分別に人の懷でも覗うやうにならば、恥は我が
 一代にとゞまらず、重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴様にいふと

も甲斐は無けれど尋常なみくならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪評もうけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見するは罰あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故なぜこれが分りをらぬ、さあ行け、歸れ、何處へでも歸れ、此家に恥は見するなとて父は奥深く這入りて、金は石之助が懐中ふところに入りぬ。

.....

お母様御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇乞わざとうやうやしく、お峰下駄を直せ、お玄關からお歸りでは無いお出かけだぞと圖分づぶしく大手を振りて、行先は何處、父が涕なみだは一夜の騒ぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩のら息子、持つまじきは放蕩を仕立る繼母ぞかし。鹽花こそふらね跡は一まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、何うすれば彼やうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顔が見たい、と御新造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峰は此出來事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻さつきの仕業はと今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして濟むべきや、萬が

中なる一枚とても數ふれば目の前なるを、願ひの高に相應の員數手近の處になく成しとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ拔けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかゝる、我が罪は覺悟の上なれど物がたき伯父様にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かゝる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかる、伯父様に疵のつかぬやう、我身が頓死する法は無きかと目は御新造が起居にしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

大勘定とて此夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それごとくと思ひ出して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸付のもどり彼金あれが二十御座りました、お峰お峰、かけ硯を此處へと奥の間より呼ばれて、最早此時わが命は無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹ひとつで無きだけを何處までも陳べて、聞かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠處としよの羊なり。

お峰が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えずとて底をかへして振へども甲斐なし、怪しきは落散おちちりし紙切れにいつ認めしか受取一通。

(引出しの分も拜借致し候

石之助)

さては放蕩かと人々顔を見合せてお峰が詮議は無かりき、孝の餘徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや／＼知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし、後の事しりたや。

(明治二十七年十二月「文學界」 明治二十九年二月「太陽」再

掲載)

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集 10 樋口一葉集」講談社

1962（昭和37）年11月19日第1刷発行

1969（昭和44）年10月1日第5刷発行

※底本では送りがな、漢字の使い方に不統一がありますが、底本通りにしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：青空文庫

校正：米田進、小林繁雄

1997年10月15日公開

2004年3月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大つごもり

樋口一葉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>